

伝書鳩

第14号



井上靖記念文化財団

そんな少年よ

井上 靖

—元日に—

これといって遊ぶものはなかった。私たちはただ村の辻に屯ろして、棒杭のように寒風に鳴っていたのだ。それでも楽しかった。正月だから何か素晴らしいものがやって来るに違いないと信じていた。ひたすら信じ続けていた。私は七歳だった。あの頃の私のように、寒さに身を縮め、何ものかを期待する心を寒風に曝している少年はいまもいるだろうか。いるに違いない。そんな少年よ、おめでとう。

俺には正月はないのだと自分に言いきかせていた。入学試験に合格するまでは、自分のところだけには正月はやって来ないのだ。そして一人だけ部屋にこもって代数の方程式を解いていた。私は十三歳だった。あの頃の私のように、ひとり正月に背を向けて、くろずんだ潮の中で机に向っている少年はいまもいるだろうか。いるに違いない。そんな少年よ、おめでとう。

私は何回もポストを覗きに行った。私宛ての賀状は三枚だけだった。三枚とは少なすぎると思った。自分のことを思い出してくれた人はこの世に三人しかいなかったであろうか。正月の日の明るい陽光の中で、私は妙に怠惰であり、空虚であった。私は十五歳だった。あの日の私のように、人生の最初の一步を踏み出そうとして、小さな不安にたじろいでいる少年はいまもいるだろうか。いるに違いない。そんな少年よ、おめでとう。

私は初日の出を日本海に沿って走っている汽車の中で拝んだ。前夜一睡もできなかった寝不足の私の目に、荒磯が、そこに碎ける白い波が、その向うの早朝の暗い海面が冷たくしみ入っていた。私は父や母や妹のことを考えていた。ひと晩中考えた。なぜあんなに考えたのだろう。私は十九歳だった。あの朝の私のように、家へ帰る汽車の中で、元日の日本海の海面を見入っている少年はいまもいるだろうか。いるに違いない。そんな少年よ、おめでとう。



そんな少年よ（詩） 井上靖……………2

ご挨拶 井上修一……………6

歴史と文学のはざま 傳馬義澄……………8

父と井上先生 山本安見子……………12

井上靖の原郷 伏流する民俗世界 ① 野本寛一……………16

鳩のおしらせ①……………25

父の休息 家族の撮った写真から ⑦ 井上卓也……………26

鳩のおしらせ②……………29

私の備忘録より 浦城いくよ……………30

鳩のおしらせ③……………41

平成二十四年度 事業報告 井上修一……………42

図書だより……………49

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子

皆様のお蔭をもちまして本財団は、平成二十四年四月一日付で、一般財団に移行することができました。それ以来、早いもので一年半が過ぎました。しかし、再出発はいたしましたが、新財団の基幹事業の一つである井上靖文化賞の再開はいまだ軌道に乗らず、理事長として責任の重さを痛感いたしております。

世田谷にあった父の家の書齋と応接間が父の生誕の地である旭川に移築され、二十四年の五月六日、父の誕生日に一般公開が始まったことは既にお知らせした通りです。さらに伊豆市湯ヶ島にあります旧井上靖邸跡地につきましても、二十四年の暮れに伊豆市へ特定寄付をし、今後の利用と維持管理、保存公開をお任せすることになりました。ご快諾くださった市長、副市長をはじめとする伊豆市役所の皆様には、この場をお借りして心より御礼申し上げる次第です。井上靖邸跡地を伊豆市の皆様のお役に立てることができて、これ

に勝る喜びはありません。両親も熊野山の墓地から微笑んで見てくれることと思います。

財団の運営に関わっておりますと、本財団がいかによくの方々のお力添えの賜物であるかが、身に沁みてよく分ります。理事や評議員、監事の方々のご支援はもとよりのこと、各地にある父の文学館・記念館等の方々、井上靖文学のファンの皆様、さらには生前の父をご存じの方々やゆかりの地の皆様です。

また、国内外における井上靖文学の熱心な研究者の方々には常々力づけられております。その代表が平成十一年に設立された井上靖研究会です。会員の皆様の活発な研究発表を拝聴するたびに、井上靖本人に聞かせられたらと思いい残念でなりません。この研究会の会長は初代が國學院大學の萩久保泰幸先生で、その後を継がれたのが同じく國學院大學の傳馬義澄先生、そして二十五年からは尚絅学園大学の田村嘉勝先生がご就任になっておられます。十年の長きに及ぶ傳馬先生の公私にわたる井上靖研究会へのご尽力に、心より敬意を表します。

平成二十五年十月吉日

かつて『蒼き狼』論争』と言われる論争があった。成吉思汗の生涯を描いた井上靖の長編歴史小説『蒼き狼』に対して、大岡昇平が『蒼き狼』は歴史小説か』と批判したその論争は、歴史小説をめぐる戦後の重要な文学論争であるとされている。

論争の要点は、次のようなものである。

大岡は、成吉思汗の大業は「氏族連合体を、専制君主制による軍事国家に編成替えしたことによって可能であった。遊牧を掠奪という手取り早い生産様式に代えたこと」で成し遂げられたのであり、井上の発明したような出生の秘密にかかわる「狼の原理」に忠実であったがためとは考えられない。井上はこの原理のために、原本の「元朝秘史」を「改竄」するなど歴史を

勝手に「改変」しており、「アメリカのスペクタクル映画」のごとく「歴史性、叙事性、道徳性、残酷性、エロチシズム」などを「現代の観衆の口に合うように料理」しているに過ぎず、「歴史小説」と言えるかどうか疑問である、と批判した（『群像』昭和三十六年一月号）のである。

井上はこれを受けて、「自作『蒼き狼』について——大岡氏の『常識的文学論』を読んで」（『群像』昭和三十六年二月号）を寄せ、大岡の言うように「氏族連合体を専制君主制による軍事国家に編成替えした」ことに成吉思汗の大業が負うているとするのは、その通りであるが、それだけの常識では成吉思汗を小説化することはできず、大岡の言う「狼の原理」の発明こ

そが自己の創作を支えたものにはかならない。「私が書きたかったのは歴史ではなく小説」であって、大岡の考えはひどく窮屈である。歴史小説はそれが小説であるかぎり、歴史的事実の間に作者の解釈が介入せざるを得ない。「元朝秘史」は「ある特殊な史書」ではあるが、それ以上に「文学書」であり「叙事詩」であって「重要な資料」ではあるものの「正確な歴史記述」ではない。したがって「元朝秘史」の記述を借りて「自己流に生かそう」とはしたが、それを「忠実に写そう」とはしなかった。「私は『蒼き狼』の中でいかなる動機のためにも歴史は改変していい」と、応じた。

要するに、歴史小説は歴史でなければならないと考えた大岡に対して、井上は歴史小説と言えども小説でなければならぬという点にこだわったのである。

もっとも、歴史小説は歴史か小説かということになると、問題は岡のように史実に忠実であるか否かというだけでは済まされなくなる。歴史が事実を記すのに対して、小説は人間の真実を描くと言われる。問

題は何が事実 (fact) であるかということだけではなくて、何をどう書いたときに真実性 (reality) が生まれるかと言うことであろう。大岡は前者を重視し、井上は後者を重くみる。両者の決定的な違いはまずそこにあった。

歴史叙述の問題は、アメリカのH・ホワイトあたりから始まってポスト・モダン批評のひとつになっているが、それを日本語で書かれたテキストにそのままではめるわけにはいかないであろう。日本語で書かれた歴史が、歴史小説と同様に、広い意味での物語として書かれてきたかどうかについての検討がなされなければならぬからである。

歴史を叙述するという問題に関しては、対象となる時代や出来事に関して多くの史料を集め、その中から史実を構成していくプロセスが、歴史（歴史叙述）と文学とにおいて共通する。いずれも想像力の作用がそこには必要なのである（ただし、歴史にとっての想像力の許容範囲は、事実と事実との関連の中で当然浮かび上がってくる制限された歴史理解にとどまらなければならぬ

い)。歴史学上の想像力と文学（歴史小説）の創作に要求される想像力とは畢竟同質のものであり、違いはそこに作用する想像力の程度問題に過ぎない。

とは言え、歴史と文学とではその叙述の中心となる対象が明らかに異なりはする。前者は、時代の精神や客観的意味を探ろうとして国家、社会、階級など集団の運動と行為とを特権化しようとするが、後者はひとつの出来事や個別化された主人公、とりわけ英雄的人物を物語の中枢に据え、歴史の全体像を問うことについては必ずしも求められはしない。このことは作家の歴史観の問題とも密接に関わってくるであろう。

歴史叙述が歴史家（叙述者）の価値判断と無関係ではありえないように、文学の創作もまたそれを生み出す側（作家）の歴史認識の表現として在る。そしてわれわれの歴史認識の構図は、同時代の社会的・政治的現実によってある程度までは規定されてしまう。その意味では、ベネデット・クローチエが「すべての歴史は現代史である」と言い、E・H・カーが「歴史とは過去と現在との対話である」と言ったのは、正しい。

とすれば、文学と歴史叙述という問題は、創作と現実あるいは想像力と真実という二元論的な対立によって捉えられるのではなく、人間社会が共有する時間と体験とをひとつの物語形式を通して表現し再現するという特徴をもつことが了解されてくるのである。それを、あるいはこう言い換えてみることもできよう。すなわち、歴史と文学とは学問／創作として対立するものではなく、いずれも認識と語りの領域に属するデイスクールなのであり、人間の経験と社会性を理解し把握するための異なるふたつの様式に他ならない、と。アーサー・ダンターをはじめとして、今日のアメリカで唱えられている「歴史Ⅱ物語論」の基本的枠組みもこのような認識に基づいているのである。

歴史と文学という問題は、コントラとして捉えうる問題ではなく、しばしば指摘されるような隔絶は両者には存在しない、というのが率直な感想である。

古代ローマ史の専門家ポール・ヴェーヌの「歴史は真実を書いた小説」であり、「諸々の出来事の物語」であると言う言葉が改めて思われるゆえんである。

〔付記〕

本稿は、二〇一二年八月十八日から二十一日にかけて中国蘭州大学において中国社会科学院ならびに中国外国文学学会日本文学研究会主催による「中国日本文学研究会第十三回全国大会と国際シンポジウム」での講演に基づくものであることをお断りしておきます。学会のテーマは「日本文学と中国——歴史の融合と創造的空間」であり、「西域・遙かなる響き 井上靖と中国」という特別シンポジウムも併設されていました。



父と井上先生

山本安見子（山本健吉・長女）

昭和三十二年十月二十六日、この日第二回中国訪問日本文学代表团として七名の作家が中国へと出発した。

七名の中に父も井上靖先生も加わっていて、この時は直接羽田空港に集合するのではなく、大手町のビル、確か新聞社だったように記憶しているが、その一室に見送りの家族共々集った。

母が「娘です」と中学生の私を井上先生に紹介したのだが、私は挨拶もせずじっと先生を見詰めている。

「お嬢ちゃん、こんにちは」と先生は二度程おっしゃったそうだが、私は黙ったまま。あの時は本当に困った、と母から幾度聞かされたことか。

私は子供の頃、興を感じると物も言わず目を丸くして見詰める癖があつて親を悩ませたのだが、さすがに

中学生になって起らなくなっていたので安心していらした。

その前年、学校の読書指導で『あすなる物語』を読んだからかな、とも思うが原因は私にも分らない。

それから三十有余年、先生は亡くなるまで私を「お嬢ちゃん」と呼び続けて下さった。

私の中で井上靖という作家が、父の友人として意識されるようになったのはこの中国旅行からであった。

この時代の作家は今のよう気軽に海外に行けなかったので、旅の途中、各々家族への土産を買ってそれらをお互い見せ合ったり、家族からの手紙も披露したりと、過密なスケジュールのなか僅かな私的な時間を楽しんだとか。

旅のメンバーは帰国してからも土産物の成果について語り合ったらしい。

「井上君がね、娘にシナ服を買って来たのにちつとも着てくれなくて部屋の壁に吊されたままなんだつて」

と父は嬉しそうに私に話した。実は父は香港で私に真つ赤なハンドバックを買ってきた。

「安見の大好きな赤だよ、本皮なんだぞ。イギリス製なんだよ」と言われても一瞥しただけで放り出したまま。この頃の私は赤なんて色は忌避していた。だから井上先生も同じと知って嬉しかったのである。

お土産と言えば、井上先生がローマオリンピックの取材に行かれた時だったと思うが、私にカメオのブローチを買って来て下さった。今でも大事にしているが、母は持っていなかったのですね羨ましがられた。

その後も井上先生と奥様は海外旅行に行かれる度に必ずお土産を買って来て下さった。いつも奥様が届けて下さり、その時の旅の話が面白く私は聞くのが楽しみであった。

父と井上先生と話が合うのは当然として、父は奥様とも話が合った。奥様は京生れの京育ち、食に関して是一家言持っておられて、食べ物の話になるとこの二人は俄然雄弁になるのであった。

奥様は料理の腕も大変なもので、毎年元日の御自宅でのパーティでは、広い応接間で供される大皿に盛りだされた幾皿もの料理が楽しみであった。突然の来客でも葱やじゃが芋のような野菜で忽ち酒の肴を作って、食いしん坊の父を唸らせていた。「奥様のような料理好きの主婦になりなさい」と父は私に言っていた。

長崎が生んだ財界人である今里広記氏の依頼で長崎十八銀行百周年記念講演会に父と井上先生が招かれ、先生が奥様をお連れになると言うので私もお供をすることになった。

長崎での二泊三日は朝から晩まで一流の料亭で接待し、我が身がフォアグラになりそうであった。今里氏と先生は一足先に東京に帰り、父と私と奥様、十八銀行の社員の方の四人で天草に一泊した。奥様の希望でキリシタン遺跡を父の説明で観て廻った。天草は魚

が美味しいことでは天下第一品。ここでも父と奥様は食べている時は料理の話ばかりであった。

この旅で奥様は「主人が一緒でない旅ってなんて気楽で楽しいんでしょ」と感嘆の声をあげられたので、何処も同じとおかしくなった。

我が家でも父がホテルにカンヅメとか旅行という時、車が坂を降りて見えなくなるや、「バンザイ」と歓声をあげる。と言って、いい事が別にある訳ではない。気が楽というか息抜きなのである。

家の主人が朝出勤して夜帰宅する仕事であれば昼間は留守なのだが、作家の家は基本的には職場が家庭の中、電話の応待、客の接待と雑用が多く家族が秘書とお手伝いさんを兼任しているので、傍で考えるより家族は「しんどい」のである。

父と先生とは共通点も多い。父の家である石橋家も代々村医者であったし、父もおおあちゃん子であった。そのおおあちゃんなる人が母方の高祖母というのも似ている。誕生日も同年で十日程しか違わない。

逆な面もあって父は三男坊の甘えん坊だが、先生は

合わせてパッチ論議をしたなんて、その時の先生の優しかった眼は今も心に残っている。

井上先生から「ちゃんと」と「うつつうしい」と言う言葉を度々聞いた。日本文藝家協会やその他の会からの帰路、我が家に寄られた時など「あの人はちゃんとした人ですね」「ちゃんと書けている作品ですね」とか「うつつうしい人ですね」「うつつうしい話ですね」と言った具合である。

先生自身常にちゃんとしてられて、私は時に近寄り難さを感じるがあった。

ところがある夜、夜中過ぎ父と帰って来て、玄関に飾ってあったおもちゃのような帆船の模型を手にとって「どんぶらこ、どんぶらこ」と船を揺らしながら動かし嬉しそうであった。思いがけない先生の行動にびびくりしたが、お酒も大変入っているようだが終始上機嫌で、側の私や母まで幸せな気持ちになった。

井上先生の御葬儀の日、次女の佳子さんが「父は山本先生が亡くなられて寂しがっております」と言われた。

如何にも長男と言った感じでビシツとしている。親元を離れて育たれたからか、周りの人への気配りが並ではない。必ず相手の何かを褒める。我が家に来られて廊下に積み上った本の山を見て「やあ、いつもちゃんど積まれてますねえ」と言った具合である。

「かえる会」で山へ行った時、徳澤園の一室での話である。明日父に着せる物の事で皆からVIPルームと呼ばれている二人の部屋へ行った。

先生はリュックから荷物を全部出し、平らに並べて一つ一つ点検中。そしてすぐに使わない物から順にリュックに詰めてゆく。父はこたつで新聞に首を突込んでいた。父は縦の物を横にもしない人なのである。私は父の横で、

「先生、明日穿かせるパッチの厚さはこれぐらいでいいでしょうか。駱駝らくだが見つからなくて母がこれを入れてくれたのですが……」

「どれどれ、ああアンゴラですね。結構、厚手一枚の方が面倒臭くなくていいでしょう」

今になってこの時を思うと、昭和の文豪と膝をつき

だが、私は父の方が先生より後に残ったらと考えるどぞとする。

井上先生が食道癌の手術をされたと長男の修一さんから電話が掛かって来た時、父は動揺して放心状態、食卓の湯呑みをひっくり返したりと大変であった。

父がどんなに井上先生を心頼みにしているかを思った。

父と井上先生は今頃、どんな話をしているだろうか。『伝書鳩』に寄せたこの原稿を「お嬢ちゃん、ちゃんと書けてましたよ」と言って下さると、いいなあ、と思っている。

野本寛一（近畿大学名誉教授・民俗学）

はじめに

井上靖の自伝的作品には諸処に民俗的素材が顔を見せている。それは、意図的に特定の民俗事象を描こうとしたものではなく、おのずからなる流れの中でのことである。その民俗素材に目をとめて、伏流する民俗世界のふくらみをたぐることは、井上靖の人間形成や井上文学に底流するものの一端をかいま見ることにつながるにちがいない。

一方、民俗学に座位をとると、作家が作品の中で寸描し、書き記した民俗素材にこだわって関連事象を紡いでみることは、時に、民俗学に新たな視界を拓かせ、

潜伏する民俗の本質を^{せまめい}闡明する道筋をつけることにもつながる。恣意的に見える試みだがとにかく回を重ねながら前に進んでみたい。井上作品に伏流する民俗世界は広く、かつ深い。

生き物との相渉

①ワタムシ

『幼き日のこと』に次の叙述があり、それは『しろばんば』の冒頭部と重なる。「その頃——と言うのは、大正の初め頃のことであるが、伊豆の天城山麓の私の郷里の村では、冬の夕方になると、しろばんば」という白い小さい虫が薄暮のたちこめている空間を舞っ

た。浮遊しているといった感じの舞い方である。しろばんば」というのは白い老婆という意味であろう。

子供たちはひばの枝を振り廻して、その葉にその綿屑のような小さい虫をひっかけて遊んだ。しろばんばは白く見えることもあれば、天候の加減で、その白さが多少青味を帯びて見えることもあった。子供たちは地面から飛び上がっては、ひばの枝を振り廻した。冬の夕暮時の子供たちの遊びであった。しろばんばの白さが夕闇の中に溶け込み始めると、子供たちはひばの枝をそこらに投げ棄てて、それぞれ自分の家に向かって駆け去って行く。——『しろばんば』の冒頭では季節は示されていないのだが、こちらでは「冬の夕方」とある。文脈からすると、その夕方も「晩秋から冬にかけて」とより細かい季節の推移指定がわかる。

『しろばんば』では、^{檜葉}の小枝を振り廻す時に、子供たちは「しろばんば しろばんば」と叫びながら走ったこと、家々から子供たちの名を呼ぶ声が聞こえたことが書かれている。この場面を自伝小説の冒頭に描き、作品を『しろばんば』と命名したこと、その象徴

性には心惹かれる。

しろばんばはワタムシ・ユキムシなどと俗称されている。半翅目、ワタアブラムシ科の昆虫である。白い綿のような蠟質物を分泌して晩秋に飛ぶ様子が「綿」に見立てられて綿虫と呼ばれ、降雪の近いことを知らせるとして雪虫とも呼ばれる。『しろばんば』を読んだ時からこの虫のことが気になっていた。しろばんばは井上靖が説く通り、「白い老婆」という意味であろう。全国各地ではどのように称されているのだろうか。方言（方言名称）を典型的に分けながらこの虫に関する伝承を紹介してみよう。

〈白系〉 シロバンバに見られる白を冠された方名には「シロコ」がある。「シロコが舞うと天気が下り坂になる」（高知県土佐郡土佐町宮古野・田村今朝穂さん・昭和二十四年生まれ）。

〈婆系〉「ユキバンバ」。「ユキバンバが舞うと雪が近い。鳴沢菜を早く漬け込め」（山梨県南都留郡鳴沢村・渡辺健一さん・昭和五年生まれ）。「ユキバンバが舞うと木枯が吹く」（山梨市三富徳和・名取喜代美さん・昭和三

年生まれ)。「ユキバンバが舞うと雪がくる」(長野県飯田市尾之島・櫻井弘人さん・昭和三十四年生まれ)。山梨市上帯郡では「ユキンバ」という。

〔雪系〕 雪虫・ユキバンバ以外にも雪を冠する方名がある。「ユキボタル」。「ユキボタルが出ると寒くなる」(岐阜県美濃加茂市出身・森川郁郎さん・大正九年生まれ)。「ユキフリムシ」。「ユキフリムシが飛ばないと冬が来ない。ユキフリムシが出ると雪が降る」(栃木県日光市五十里・細井沢吉さん・昭和十四年生まれ)。「ユキンコ」。「ユキンコが出ると雪が降る」(甲斐市下菅口・飯窪富明さん・昭和六年生まれ)。「ユキオコシ」。

〔冬にしては暖かい日にユキオコシが飛んだ。ユキオコシが飛ぶと雪荒れがし、風も吹いた〕(長野県飯田市松川入出身・塚原千晶さん・昭和五年生まれ)。

〔粥・飯系〕 「ケーケームシ」。「小学生の女兒たちはケーケームシが舞うと、てんでに棒を持って「ケーケームシ生まれ この木へ生まれ」「ケーケームシ生まれ 菊の花に生まれ」と囃したてた」。また、ケーケームシが舞うと雪か雨が降る、とも伝えた(長野県下

がれ——の音が聞こえてきます。一尺(約三〇センチ)さがれというのは、わた虫が子供たちの身長よりやや高めの空間を舞っていて捕えにくいからです。飯田ではこの虫をとらえるとわた(綿)の上ののせて、こんどは、へわたむし わたむし わたしよえとうたいます。遠山谷ではわた虫のことをべつに、まんとも呼び、へまんまん 出てこいよ ちいちのまんまくれるで わた虫は白くて小さくて、ちょうどまんま——白いごはんを連想させるところから、この虫をまんまんと呼ぶようになったのだと思います——ここに「マンマン」を加えることができる。

〔オマン〕。静岡県牧之原市蛭ヶ谷ではワタムシのことをオマンと呼ぶ。同地の長谷川しんさん(昭和十一年生まれ)は、「オマンが飛ぶとお亥の子様だ」と語り、鈴木正次さん(昭和二年生まれ)は次のような童唄を伝えている。へオマンこつちゃこい ボタ餅よくれる 今日の子でもつとくれる——長野県飯田市南信濃八重河内の山崎今朝光さん(大正十一年生まれ)もワタムシのことをオマンと呼ぶ。私は、鈴木さんか

伊那郡清内路村下清内路出身・小林ヤス子さん・大正十五年生まれ)ケケームシとは、その白色から米の白粥を連想し、「粥粥虫」と称したものと考えられる。

この事例は、手に棒を持って、ワタムシを囃すという点で、檜葉の枝を持って子供たちが囃す『しろばんば』の冒頭と共通している。飯田市今宮町の宮下智子さん(昭和十八年生まれ)は、ワタムシが舞うと子供たちは、「ワタムシ ワタムシ 一尺さがれ」と囃したという。一尺は、子供たちが手を伸ばした高さの一尺ほど上にワタムシが舞っていることを前提としたもので、これも『しろばんば』の冒頭場面と共通している。

松山義雄は『山国のわらべうた』(信濃路・一九七二年)の中で次のように述べている。「……飯田市周辺でいうわた虫で、十月下旬のくもり日から姿を現わしますが、わけても山国特有の初冬のどんよりとした日には、どこからこんなにわいて出たかと思うほどたくさんわた虫がむらがって舞っています。そんな日には子供たちの間から、へわたむし わたむし 一尺さ

らへオマンこつちゃこい……を聞いた時、これは女性の名前だと思った。しかし、遠山谷のマンマンとつけてみると、これが白いオマンマ、白い飯から発想されたものであることに気づく。『しろばんば』では、子供たちが檜葉の枝を持って、囃したてながらワタムシを追う様子が描写されており、『幼き日のこと』を併せてみると、これが、晩秋から初冬にかけての、子供たちの民俗的季節遊戯であったことがわかる。こうした遊びは他地にもあり、童唄を伴う例があったことをここではたしかめておきたい。

〔綿系〕 ワタムシがその代表であり、この通称を以って気象伝承・季節伝承を語る例は多い。「ワタボウシ」。「ワタボウシが舞うと雨が降る」(飯田市別府出身・中村恵美さん・大正十五年生まれ)。静岡県賀茂郡東伊豆町大川出身の浅田以知乃さん(昭和二十一年生まれ)も東伊豆町ではワタムシのことをワタボウシと呼んだという。

〔その他の方名〕 「オイノコバエ」。「十月の子に米の団子を食べる。そのころよく舞うのでオイノコバ

エという」(徳島県名西郡神山町神領・阿部昇さん・昭和二十三年生まれ)。先に紹介した静岡県牧之原市の事例と類似点がある。「ミケ」。「ミケが出るころ栗の実が乾燥する。ミケは栗から湧く、という言い伝えがある」(宮崎県東臼杵郡椎葉村竹の枝尾・中瀬守さん・昭和四年生まれ)。

このように、ワタムシは各地で様々な方名をもって親しまれてきた。ワタムシ・ユキムシと呼ぶ地でも様々な気象伝承や季節伝承を聞くことができる。

さて、ここで、『しろばんば』の舞台となった湯ヶ島におけるシロバンバについての伝承に耳を傾けてみよう。筏場から長野下へ嫁いできた浅田くみさん(大正十年生まれ)は次のように語る。シロバンバは晩秋から初冬の、おもに夕方舞う。曇った日には昼でも舞う。光が薄い時に舞う。ブト(蛎かき)がたくさん出るとお天気が変わるといふが、シロバンバもそんな気がする。湯ヶ島長野小字箒原の浅田喜朗さん(昭和十五年生まれ)は次のように語る。同家には水車があった。晩秋の夕方、水車の水の飛沫が霧のようになるとそこにシ

ロバンバが群がった。「シロバンバが飛ぶと翌日は雨が降る」と言い伝えていた。湯ヶ島、白壁荘の女将、宇田晴子さん(昭和二年生まれ)にシロバンバのことを尋ねると、開口一番、「シロバンバは背中に綿を背負しょってます」と応じ、季節は晩秋と思われるが、午後も夕暮近いころシロバンバが出ると、子供ばかりでなく、中にはおともも混って、手に藁わら心製の座敷帯をかざしながら、へシロバンバ シロバンバ 綿を背負しょって こいこい——と囃なやしたてながら下田街道を走ったものだという。手にかざしものを持つこと、童唄を以って囃しながら走る点など、先に記した長野県飯田市の事例と共通する。この国には、季節に即した豊かな遊び、小さな小さな生きものとの美しい交感が生きていたのである。

各地で聞いたワタムシの伝承には、気象・季節にかかわるものが多かった。しかし、井上靖の『しろばんば』『幼き日のこと』では、一日の中の時間、シロバンバが舞う刻限、夕暮・薄暮・夕闇など夕刻が強調されている。このことは、作品の内容や標題の象徴性と

絡むところがあるので次回以降に述べたい。

② ネズミ

『しろばんば』の中に次の会話がある。「ばあちや、何してた？」とひと言だけ声をかけた。「鼠と話をしていた。今夜は鼠の運動会で、さつきから騒がしいことちゃ」おぬい婆さんはそんなことを言って笑った。

——『幼き日のこと』で、鼠は次のように登場する。「私はおかのお婆さんと二人で、いや、もつと正確に言うと、たくさんの鼠たちともいっしょに住んでいたのである。あまり自慢にはならないが、私の最も幼い頃の記憶と言ったら、毎晩のように枕もとを駆け廻っていた鼠たちのことのようなのである。夜半眼覚めると、必ず何匹かの鼠が掛蒲団の上を駆け廻ったり、枕もとを運動場にしていたりした。しかし、私は少しも怖くはなかった。毎晩のように寝る時、おかのお婆さんは部屋の隅に鼠の分として少量の食糧を置き、こうしておけば決して鼠は人に危害を加えることはないと言った。私はそのおかのお婆さんの言葉を信じていた。」

人と鼠の関係は単純ではなく、そこには常に葛藤があった。鼠は人の暮らしに害を与え続けてきた。それも多様で、農作物・貯蔵穀物・貯蔵食品・干し芋・干し柿・凍み餅などに対する食害、養蚕の蚕や繭、栽培桐にも害を与えた。離島における鼠害は特に著しく、鼠のために島が減じたという伝承もある。琉球弧では鼠送り(農作物に害を与える鼠を芭蕉の筏などに乗せて海の彼方に送る行事)が盛んに行われたが、一方では、鼠のことをウエンチュ(上の人)、ウエガナシ(上の主)とも称し、太陽の使いだとする伝承もある。三宅島では村落ごとに鼠の神が祀られ、鼠に対する祝詞も伝えられていた。こうした葛藤の大方については拙著『生態民俗学序説』(白水社・一九八七年)、『生態と民俗・人と動植物の相渉譜』(講談社学術文庫・二〇〇八年)で詳述しているのでここでは最小限の報告と、新視点の素描に留める。

湯ヶ島長野の浅田武さん(明治三十二年生まれ)も蚕に対する鼠の被害には手を焼いたと語っていた。蚕

に対する鼠害対策としては、伊豆では蚕室に通じる鼠穴に杉の葉を置くというのが一般的だった。また、伊豆にも鼠送りがあり、その話が心に残っている。以下にその詳細を見てみたい。

賀茂郡松崎町池代の斎藤さとさん（明治三十六年生まれ）・山本吾郎さん（明治四十一年生まれ）から次のように聞いた。同地の民家の屋根は戦前まではほとんどが萱（薄）葺きだった。萱は共同の萱山から採取するもので、貴重な素材だった。ところが、鼠がその萱の根を噛んで萱山を全滅させることがあった。また檜にも害を及ぼした。さらに、野鼠の大群が稲田に入ることがあった。ひどい時には稲田の中に鼠が丸い巣を作り、中に仔がいることもあった。鼠の害が甚しい年には、若い衆が神輿状の籠に幣束を立てたものを担ぎ、ムラ中の者が列を作って上の古屋敷から下の大沢境の神送り淵のところまで、鉦・太鼓に合わせて次のように声をそろえて誦しながら送った。へちーちーヤイ 逃げるヤイ ニヤーニヤー猫が送るわい——。一方、「火事の前にはその家からすべての鼠が姿を消す」「鼠

七一年）に、北上市立花では小正月に鼠の形に擬した餅をつくってオガノカミサマ（宇迦之御魂の神）とよび、盆にのせてキスネビツ（米櫃）のなかの米の上に置いたと報告されている。鼠を祭ることによって鼠が米を盗むことを抑止しようとする心意が見える。

「鼠浄土」と総称される昔話がある。「おむすびころりん」である。例えば爺が山へ行つて弁当のおむすび・団子などを食べようとして落としてしまう。穴に転りこんだおむすびや団子を追いかけてゆくうちに爺は鼠の世界へ入りこむ。鼠は、「猫さえおらねば鼠の世の中 ストトン ストトン」と歌いながら餅や金を搗いている。鼠は爺からおむすびや団子をもろう。爺は鼠から金や宝物をみやげとしてもらって帰る——といったもので、様々な変化を伴って各地に伝承されている。この話の中には様々な要素が混在している。異郷訪問・異類間交流・野鼠が地下の穴に棲む習性（根棲み）を思わせること・鼠が物を集める習性、などである。『幼き日のこと』に描かれたおかのお婆さんの行為、即ち、鼠の分として食糧を与えたという部

は火事を教えてくれる」といった伝承もある。

賀茂郡西伊豆町大城の市川至誠さん（大正五年生まれ）は次のように語る。鼠は萱や農作物に害を与えた被害のひどい時、ムラびとたちは鼠送りをした。一斗缶の空缶・鉦・太鼓を叩きながら、へちーちーヤイ 逃げるヤイ ニヤーニヤー来るぞ——と大声で誦し、尾根から沢へと追いかけて、海に向かって追い出した。次に、「おかのお婆さんは部屋の際に鼠の分として少量の食糧を置き」と言うところに注目したい。ここには、明らかに「共存の民俗思想」がかいま見える。山梨県甲斐市旧敷島町域では五月六日に蚕影様を祭り、繭の増産を願った。この日鼠に米をあげれば蚕や繭が鼠に喰われないうって鼠の通り道（穴）に米をあげたという例がある。柳田國男は『年中行事覚書』（初出一九五五年、講談社学術文庫・一九七七年）の中で、長野県南安曇地方の例として、旧暦十月十日の案山子あげの日に「鼠の年とり」と称して餅を供えたとしている。収穫祭である案山子あげの日に鼠を祭ったのである。森口多里『日本の民俗・岩手』（第一法規・一九

分に照らして、「おむすびころりん」のおむすびや団子について考えると、この昔話の発生の基点に、鼠の穴、あるいは鼠の巣のありそうなところに握り飯や団子を献供するという極めて素朴な儀礼があったことが推考される。その献供の目的は鼠害の抑止だった。それが成長し、脚色され、「おむすびころりん」になったと考えることができるのだ。

『古事記』の大国主神が野の中で火の難に遭った時、鼠が出てきて「内は富良富良、外は須夫須夫（内はうつろで、外部はすぼんでい）と呪言を述べる。これは地下空間、穴、鼠の世界を示すもので、大国主神はこれによって助かる。鼠が火難から人を守るといふ松崎町の伝承に通じる伝承が古代以来生き続けてきたことがわかる。ネズミ＝根棲みの匂いもある。

さて、おかのお婆さんが部屋の際に置いた食糧と「おむすびころりん」のおむすびが、鼠への献供としての共通性を持ち、そこに重い意味があるということ、以下の事例を併せて考えてみることにによってわかる。

〔寒施行〕^{かんせぎょう} 狐施行ともいう。最も寒い寒中に、狐の棲みそうな場所に油揚げや赤飯・小豆飯の握り飯を供えながら巡回する。京都府・大阪府・兵庫県・福井県の一部で行われた。

〔狼の産見舞ほか〕 静岡県浜松市北区引佐町寺野の伊藤金松家の先祖が、お産をして子に乳を吸われて痩せ細っている山犬（狼）を見つけた。そこで伊藤家の先祖は赤飯を蒸して山犬のところへよろこびに行った。山犬は、お礼に、伊藤家の玄関に熊の足をおいて行った（寺野・松本長市さん・大正六年生まれ）。若手県には馬を狼害から守ることを目的として赤飯その他の供物を供えて、オイノ（山犬、即ち狼）祭りを行う地が点在する（菱川晶子『狼の民俗学・人獣交渉史の研究』東京大学出版会・二〇〇九年）。

柳田國男の『遠野物語拾遺』（初出一九三五年、『遠野物語』新潮文庫・一九七三年）には、小正月に「狼の餅」「狐の餅」を作って苞とに入れ、山の麓に供えたとある。また十二月二十日には陸の神（鼬鼠いたぶら）の年とりをしたと記されている。

対立する生き物に対して一面で親和性を示す民俗があった。人を圧倒するほど強い力を示すものに対して徹底排除・徹底対立を貫くことなく、共存を模索してきたのである。まして、共生的関係を結んでいる生き物に対する眼ざしはやさしかった。鳥取県八頭郡智頭町上板井原で暮らした平尾新太郎さん（明治四十一年生まれ）は、毎年端午の節供に粽ちまきを作るのだが、燕つばきの分も作って上がりガマチの鴨居に吊るしたという。井上靖が鼠との共存を体験したことの意味は重い。その、「共存の民俗思想」は、おのずから様々な生き物とのかかわりにも及んだはずである。

◎井上靖記念館（旭川市）行事予定

【企画展】

○第三回企画展「井上靖 現代文明批判」展
平成二十五年十一月二十三日～二十六年二月十六日
昭和四十年代に発表された小説「夜の声」「樺の木」「四角な船」を通して井上靖の現代文明に対する思いを探ります。

【講座】

○井上靖記念館文学講座
「井上靖の小説を読む」——初期作品の魅力について
とき・平成二十六年一月二十五日午後一時半～三時
ところ・井上靖記念館ラウンジ
講師・片山晴夫氏（北海道教育大学特任教授）
参加料・無料

今回の講座では、井上靖文学の初期作品の「構成」について考えていきます。人物表象（人物像）の「造形法」と物語の「主題」——この二つがキーワードとな

ります。

【読書会】

○赤い実の洋燈読書会
毎週土曜日午前中、井上靖作品の読書会を実施しています。
早く効率的に本を読む以外の読書の楽しさを味わってみませんか。

問い合わせ・井上靖記念館

北海道旭川市春光五条七丁目

☎〇一六六一五一―一八八





父、筆者の娘直子と御機嫌タイム

この言葉には、さぞかし編集者の方々も父の親バカぶりにびっくりされたことと思う。
 今、僕が思うに父のこんな「遅れてやってきた子煩悩」は父の立派な趣味であり、スゴロクで言えば、父の人生の「イチチョッ、上がり」を示していたのではないか。

鳩のおしらせ②

して有名な白井浩二先生だった。先生としては、ペンクラブでお手伝いしている小説家の息子が自分が勤務している大学に合格したというのに知らん顔もできないというわけで、父に祝いの手紙を下さったのである。その手紙の中には、「優秀な成績で合格なさり……」と祝意が書かれていたらしい。ピリでの合格だったかもしれないが、合格は合格だから、先生としては当然そう表現されたわけだ。父は、この手紙に大喜びしてしまった。

「白井君が優秀な成績と言ったからには、卓也は一番で入ったかも知れん」
 と、父は母や僕の目の前で言った。有名大学に、デキがいいとはとても言えない息子が一番で入るなんて考える父の飛躍ぶりに母は、あきれ顔だったが、父は、そんな風に憶測すると、何の証拠もなくすぐに自分の考えを確信してしまうようなところがあった。そして、迷惑なことに、仕事で来られる編集者の方々に、
 「今度、この子が一番で……」
 と、ふれ回った。

◎井上靖文学館（長泉町）企画展

「今でも『氷壁』とナイロンザイル事件」展
 二〇一四年一月九日～三月二十五日

井上靖の代表作「氷壁」は、一九五六（昭和三十一年）十一月から翌年八月まで『朝日新聞』に連載された新聞小説である。実際に起こったナイロンザイル事件に取材し、事件の究明がなされる中で執筆された。

本展では、小説「氷壁」と実際のナイロンザイル事件を比較し、取材と創作の関係性に迫る。

「切れたナイロンザイル」を期間限定で公開、「風雪のビヴァーク」の著者・松濤明氏の手帳レプリカも展示する。

問い合わせ…井上靖文学館

静岡県長泉町東野クレマチスの丘（スルガ平）五
 一五―五七 ☎〇五五―九八六一―七七七一



私の 備忘録 より

浦城いくよ

平成二十四年度



平成二十四年度に私が関わった父井上靖および井上家に関する行事について報告いたします。

本年（平成二十五年）一月には地震と津波で大きな災害が発生した宮城県南三陸町を訪ね、テレビで見るとは大分違った現場を見てまいりました。父が亡くなって二十二年、母は来年七回忌を迎えます。昨年、井上の遺族たち有志は、旭川に移築した書齋と応接間のオープン式の式典に参加いたしました。

これで、私たちがいつも呼んでいた「世田谷の家」は全く形としてなくなってしまいました。私の気持ちの中ではつきりと一つの時代が終わりました。両親がいなくなっても家があるうちには、何かあるごとにすぐ「世田谷の家」に集まり、元旦には昔ながらに一族四十何人がご馳走を持ちより、楽しく新年を祝っておりました。でもこの一大行事も出来なくなり、それぞれの

家でお正月を迎えるようになりました。「私の備忘録より」を永い間書いてまいりましたが、これを機にこの号で終了させていただこうと思います。時代の流れとともに、備忘録に是非書かなくてはと思うような大きな出来事も残念なことになってまいりました。

平成二十四年

四月四～六日

旭川行。時間通り羽田を出発したのだが、旭川空港は雪と風で降りられず、一時間上空をまわっていた。羽田に引き返すとのアナウンスがあったが、幸い引き返さずに着陸した。

井上靖記念館は職員の方が大分入れ替わっている。移築オープンも近いので、午前中、職員の方々が私に挨拶に来られながら、書齋と応接間を見て帰られる。書齋と応接間の飾りつけを館の方とご一緒にする。大忙しである。

一般の方々にはお見せしないが、収蔵

庫も大きく、ちよつとした隙間も大きなパネルが立てかけられるように出来ている。昼食は「赤い実のランプファンクラブ」の方々のお誘いに応じてお寿司屋さんへ。ゆつくりお話ししたかったが今回は時間がない。

展示を受けもっておられる平野武弘先生から沢山の質問を受ける。「先生はどこでお休みになつていましたか」「執筆は書齋だけで他の部屋ではなさいませんでしたか」とか「その時は他の人は部屋には入れましたか」など、私にはなんでもないことだが家族の者以外には分からないことをたずねられた。

観光課の平島淳嗣さんが来られる。旭川市の観光大使になつているので私の方からご挨拶に行かねばならないのだが、時間のある限り部屋の飾り付けをする。

四月八日

旭川の記念館でこのたび中学生と高校生を対象とした井上靖エッセーコンクールを創設するにあたり、選考委員の中に全国的に名のある方を一人入れたという希望が寄せられ、インターネッツを使いながら、一日がかりで調べしてみる。適当な方はすでに沢山の委員をやっていることが多く、なかなか難しい。

四月二十五日

唐家璇新中日友好協会会長歓迎レセプション。ニューオータニ「芙蓉の間」十六時～。修一、甫壬、いくよ出席。昨秋、唐家璇氏に中国（北京、大連、南京、上海）に招待された。そのお礼のご挨拶もあり出席した。

日本モンゴル親善協会四十五周年記念レセプション。スクワール麴町、十八時三十分～。いくよ出席。

柳沢徳次氏が理事長をしている日本モンゴル親善協会の四十五周年を祝う会。柳沢氏は私の友人のご主人でもある。フレルバートル駐日モンゴル大使や柳沢氏にも久しぶりにお目にかかる。

四月二十六日

風邪気味で気分が良くない。旭川の荒川美智さんより書齋オープンの式典に出席する家族のそれぞれの予定を聞いてこられる。

五月五～七日

書齋・応接間オープン。旭川行き。旭川へ移築することが決つてからの井上の家は映画のセットに使用されたが、沢山の家具や本の整理、家とのお別れ会など次々と並大抵のことではなかった。父の生れ故郷にある井上靖記念館の展示室の横が書齋・応接間にとつての永住の場所となった。

父の誕生日の五月六日にオープン記念

式典が催され、兄弟姉妹とその連れ合い（妹の夫を除く）がすべて参加。どこを見ても北海道の桜（えぞ山桜）が満開で、晴れ男の父にふさわしい晴れやかな日だった。父はエッセイで自分の生れた五月の旭川は百花が一堂に咲き、素晴らしい季節だと書いている。

五日

午後記念館へ。ラウンジで私たちの到着を待っていて下さった表千家旭川地区青年部の方々からお点前のおもてなしを受ける。書齋・応接間は世田谷にあった時と違い、本も燻蒸され、きれいに埃も取り払われて明るくなっている。私以外の人は久し振りの展示や館の周囲などゆつくりと楽しむ。夕食は家族で居酒屋へ。

六日

午前旭川市の広報誌『あさひばし』の記者とカメラマンにインタビュー取材



旭川観光大使の楯を西川市長よりいただく。

を受ける。「このまちで、このまちから」という特集に掲載されるとのこと。午後の式典に先立って西川旭川市長から遺族に感謝状が贈られた。また、いくよに旭川観光大使の楯が市長より贈呈された。

十三時より書齋・応接間のオープン記念式典が開かれた。

*ご挨拶

旭川市長 西川将人
教育委員長 山下善彦



書齋・応接間のオープン記念式典でのテープカット。

ナナカマドの会会長 松田忠男

*井上家挨拶 井上修一

*テープカット

市長、教育委員長、市議会議長（三井幸雄）、ナナカマドの会会長、修一、いくよ

*記念講演

「井上靖と住まい」 井上修一

オープン記念祝賀会。ロワジールホテル、十八時三十分。

市長の挨拶につづいて北海道新聞旭川支社長三塚昌男氏の祝辞、卓也、いくよ、修一、佳子とそれぞれ壇上にてご挨拶をする。つづいて小池語朗教育長、松田忠男氏の挨拶。

祝賀会では元教育長の後藤典亨氏を始め、懐かしい方々にお目にかかれ、旧交を温めることが出来た。ナナカマドの会員の皆さんも大勢の方が出席され、とても楽しい会だった。

ナナカマドの会の方々には二次会にまで連れて行っていただき、井上の遺族たちは温かいおもてなしに感謝の気持ちで一杯だった。

満開のえぞ山桜にナナカマドの

新葉光かれり移築祝うや

七日

有名な旭山動物園、嵐山陶芸の里、優

佳良織工芸館などへご案内いただく。

今は亡き木内綾さんには何度もお目にかかっている。母と何回か何ったときの本内家の応接間の様子が目に浮かぶ。母は木内さんから頂いた赤い優佳良織のチャンチャンコがお気に入り、家でお客さまの接待の時などによく羽織っていたが、とてもよく似合っていた。私は母の形見としてこのチャンチャンコを貰った。赤い優佳良織が背に施されたお洒落な椅子は修一宅にある。最後は飛行場で夕食に美味しいお寿司を皆でご馳走になった。移築に関して最初に私がお願いした旭川市副市長の表憲章氏がお見送りに来て下さった。

五月十三日

先日、町田のペンの会より「わが母の記」について書いてくださいたとの依頼を受けていたので、「映画 わが母の記に思う」と題して書く。

五月十八日

財団打合せ、修一宅。甫壬、秀彦、佳子、いくよ出席。

秀彦さんが帰国中なので、シドニーの大谷正矩さんとの金銭的なやり取りの説明を受ける。

五月二十四日

オーストラリアのシドニー大学で催される井上靖賞の授賞式での挨拶文をシドニー在住の大谷正矩さんにメールで送る。

シドニー行きの準備。長い間使用してきた旅行カバンもいよいよダメになってしまった。サムソナイトの超軽量のカバンを求め、土産物その他準備に一日がかり。

六月一日

井上靖賞の授賞式はシドニー・コンサーバトリウム・オブ・ミュージックの音楽堂で開催され、井上家からはいく



井上靖賞をエドウィナ・パルマーさんに授与する。シドニー大学にて。

よと佳子が出席した。今回は六回目であるが、初めてオーストラリアでなくニュージーランドのヴィクトリア大学のエドウィナ・パルマー准教授が受賞された。受賞論文は万葉集の歌に関するもので、「A poem to camp about?」。

受賞論文の内容は私には分からないが、お話をすると日本の昔のことをよくご存じの女性の先生だった。ニュージー

ランドからリュックサックを背負って来られている。私は井上靖記念文化財団を代表してご挨拶と賞状の贈呈をした。

本年度の特別プログラムとしてはシドニー大学音楽学部教授の磯田秀樹氏とピアノの裕子さんご夫妻の監督・演出により、「井上靖とシルクロード・敦煌——音楽と画像と詩の朗読」が開かれた。父の詩「残照」「モンゴル人」他に高田三郎氏が合唱曲として作曲したものが、日本からの有志の方も加わって編成された合唱隊によって演奏された。とても素晴らしく、出席の方々に感動を与えた。佳子は詩を朗読した。

枯葉舞い秋深み行くシドニーに

父の詩うたうイベントありて

六月九日

旭川市井上靖記念館館報に掲載する

「表札」と「絨毯」の二つのエッセイを書き、メールで送る。今号から旭川へ差し上げた展示品の中から、その品々がどういふ背景とかわれを持ったものをエッセイにすることにした。

六月二十五日

須田国太郎氏のバラの絵を撮影に旭川市井上靖記念館から学芸員の近藤由香利さんと知人のカメラマンの安藤佐也加さんが来宅。いつも井上の応接間にかけてあった絵なので、写真を実物大の大きさにして記念館の応接間にかけてか。シャッターを閉めて真つ暗にして日本間で撮影をされる。

六月二十九日

Soyaの会に初参加。今回はキルギス共和国大使を招いてキルギスの話を聞く会。父が行くことを熱望していたのにどうしても行くことが出来なかった

イシククル湖で、キャンプファイヤーを囲み、満天の星の下で父の詩を読んで生誕百年を皆で祝ったこともあり、大使のお話を拝聴しに出掛けた。大使の話の後で私も頼まれてキルギス・イシククル湖の話をした。大使夫人は以前キルギス大使館で何回もお会いしていた方で声をかけていただきびつくりした。大使は日本に留学されており、父の「西域物語」を読んでおられた。

天高く連風あがるイシククル湖
青き湖面は静かなりけり

七月二十一～二十二日

井上靖研究会。文化学園文化軽井沢山荘、十四時三十分。

修一、甫壬、佳子、恒雄、いくよ出席。

*会長挨拶 傳馬義澄

*研究発表

「中国における井上靖「敦煌」の受容について」蔡慧穎（北海道大学）



井上靖研究会。井上の山荘を背景に。

*講演
「井上靖のうしろ姿」大塚清吾（写真家）

*懇親会

翌日希望者は井上靖の軽井沢山荘を見学。近くにある私どもの胡桃山荘（父が命名）にも立ち寄られ、ベランダでひと休みしていただく。

一泊の軽井沢での研究会
山荘を背に記念撮影

七月二十四日

旭川記念館の読書会が発行している冊子『赤い実の洋燈』からの原稿の依頼に何を書こうかと迷った末、オーストラリアのシドニー大学で数年前から実施されている日本文学研究者に与えられる井上靖賞について、旭川の皆さまにも知っていただきたいと思い、記してみる。

七月二十七日

米子の井上靖記念館友の会の会報『海鳴り』に「映画 わが母の記に寄せて」を三日がかりで書き終え、投函する。この三日間、植木屋さんに植木の手入れしてもらい、茂っていた枝葉がなくなりすっきりした。

八月十日

旭川相談役会。クラブ関東、十二時三十分。河合伸子部長、荒川美智副部長、清水節男。いくよ出席。

軽井沢の家から出掛けたが、やはり東京は暑い。清水さんに移築の件、賞のことなどを報告。終了後女性三人で旭川のことなど話し合う。

八月二十五日

涼しい軽井沢に滞在している間に『伝書鳩』の原稿をとにかく書く。つくし野に帰ったら雑用に追われ時間がない。今夜はなんと夜二時近くまで。

九月二十六日～十月八日

スペイン旅行。恒雄、いくよ。

十月九日

国際交流基金賞授賞式。六本木アカデミー、十八時。恒雄、いくよ出席。

*フランス国立東洋言語文化大学日本

語・日本文化学部

長年にわたり日本語教育、日本研究者の育成に尽力し、日本語の普及と日本研究の推進に貢献。

*村上春樹

小説を通じて現代日本文化を世界に紹介し、世界各国に日本語、日本文学、日本文化に対する関心を集めるきっかけを作った。

*アイリーン・ヒラノ・イノウエ

日米交流の架け橋として様々な事業を通じて日米間のネットワークの形成や将来を担う若年リーダーの育成と交流に尽力した。

昨日スペイン旅行から帰国したばかりで疲れていたが出掛ける。国際交流基金とは井上靖全集を世界の図書館や大学に贈呈した時からの縁で、オーストラリアの井上靖賞でも大変お世話になっている。

十月十日

「猟銃」朗読、二木てるみ。赤坂RE D劇場、十九時。恒雄、いくよ出席。「猟銃は私の宝」と言って下さっている二木さんの朗読はシンプルで素晴らしい。齢を重ねるごとに輝いてきている。

十月二十七～二十八日

米子の井上靖記念館友の会の文学散歩。会報『海鳴り』を発行して下さっている友の会の皆さまとの文学散歩。小説「星と祭」に描かれている琵琶湖北の十一面観音を訪ねる旅。読書会で「星と祭」を読み込んでおられるので、私の説明などは不要なくらいだが、父が語った十一面観音さまのこと、高月町に図書館と井上靖記念室が出来るまでの話など話せば伝えたいことがある。五年ぶりで皆さまに再会した。若い時代とは違う。自分を含め、五年という年月は皆の姿を変えてしま

う。気持ちは昔のままなのに。悲運を持つ琵琶湖北の観音さまを巡る「星と祭」の文学散歩。

十月二十九日

小西国際交流財団の日仏翻訳文学賞授賞式。東京會館ロイヤルルーム、十八時。修一、甫壬、恒雄、いくよ出席。ポール・ヴァレリーの次の二つの翻訳をした恒川邦夫氏に与えられた。

*『精神の危機その他十五編』

*『テスト氏と「物語」』（ヴァレリー集成 第一巻）

恒川氏は修一と一橋大学で同僚だった方とか。毎年のことだが、レセプションのお料理がとても美味しい。

十月三十日

大谷正矩夫妻から東京クラブへ夕食の招待をされる。ホテルオークラのレストラン・テラス・ジュレで来年のシド

ニーでの井上靖賞授賞式でのイベントについて打合せを一時間ほどした後、今年のシドニーでのイベントでお世話になった磯田夫人でピアニストの裕子さんとその母上と私ども夫婦。オークラホテルの近くにある東京クラブへはブラブラ歩いて行く。私も恒雄も始めての場所。大きくゆつたりとした贅沢なクラブ。

十一月一日

正矩夫妻と長男を鷺沼の「とうふやうかい」に。修一、佳子、いくよ。

新財団の経理のことなどを正矩さんにもよく理解していただきたく、理事長である修一ともよく話し合ってもらう。

十一月九日

国際交流基金設立四十周年記念シンポジウム。有楽町朝日ホール、十三時～十八時。恒雄、いくよ出席。シドニーで井上靖賞とイベントが始ま

ったときからお世話になっていた小池若雄氏が転勤で日本に帰国された。「私のオーストラリアでの初仕事が井上靖先生のこの仕事で、最後の仕事がまた井上靖先生の賞とイベント関係の仕事でした」と言われた。その小池氏からのご案内だったので出掛けた。

十二月二日

井上靖研究会と懇親会。國學院大學院友会館三階大会議室、十四時。修一、甫壬、いくよ出席。

大変寒い一日。役員の改選があり、長期にわたり会長をして下さっていた傳馬義澄氏が会の若返りを図りたいと辞退され、新会長に田村嘉勝氏が選任された。事務局も高木伸幸氏となった。

*研究発表

「井上靖文学における「中国」何志勇 *講演

「井上靖のリリシズム」 「わが母の記」の内質」 榎林 混二

*懇親会

十二月二十一日

旭川市井上靖記念館の荒川さんより電話があり、本年からやり始めた中高生対象の井上靖エッセーコンクールの初募集(題名「わが母」)は夏休み後に募集したにもかかわらず二百六十編もの応募があったと知らせて下さった。

平成二十五年

一月二十七日

あすなる忌。つくし野の町内会の役員会と重なり欠席する。

今年は例年のイベントに加えて

*座談会「子どもが語る父のナイショばなし」修一、卓也、佳子参加。進行役は息子の浦城義明。

*瓊花を井上家の屋敷跡に植樹

揚州市から姉妹都市の佐賀市に贈られ、森林公園の中にある靖の碑の周りに植えられた瓊花が挿し木で増やされ、そ

れを湯ヶ島にある靖の墓地に二本移植した。それをさらに挿し木で増やしている。

二月六日八日

旭川行き。旭川市の観光大使に任命されているので旭川の冬まつりをぜひ見たい。特に氷彫刻世界大会は氷彫刻としては日本で唯一の公式国際大会。

六日

昨夜から大雪が降るというテレビの予報で、羽田近くのホテルに泊まるうと思ったが、世の中はそう甘くはない、どこも満員。朝起きたらだいぶ積もっている。直行バスは動かない可能性があり、横浜駅を経由して京浜急行で羽田へ。

冬の旭川は初めて。昔のオーバーを二十年ぶりで着て出かける。旭川空港には荒川さんが迎えに来て下さる。寒いのは覚悟してきたがそれほど寒く感じ

八日

今日は館でゆつくり平野先生と上田さんより企画展のための質問を受ける。夕方表副市長が忙しい合間をぬって来て下さる。

早々に館に別れを告げ、昨夜作って出来上がっている冬まつりのコンクールのための氷彫刻を見る。寒い旭川で見ることが出来ない繊細な作品が街路に並んでいた。

旭川の氷彫る音コッコツと

大会目指し零下の夜半に

二月十一日

井上の家を壊すにあたり、余った靖の本の一部をとにかくわが家へ運んできた。家のあちこちに積み上げてある本の整理をやらなくてはならない。整理の仕方を考え、一日途方にくれる。年代順に分かりやすく単行本や文庫本などに分けておきたいが、残念なことに

ない。教育委員会へ。小池語朗教育長、赤岡昌弘学校教育部長、河合伸子社会教育部長の三人にご挨拶に。

井上靖記念館へ。雪が窓をおおっていていつもの見慣れた風景とは異なるが中は暖かい。展示「井上靖 人と文学Ⅲ」新聞記者時代

昨年五月に移築しオープンしたばかりの書齋、応接間がすっかりこの場所になじんでいて、不思議な感じがする。

冬の夜の通りはナナカマドの街路樹に施されたイルミネーションが深い雪の中、淋しいがとても素敵で美しい。

七日

館では平野武弘先生と上田郁子さんが今度の企画展に関して書物では分からない父の日常のことなどを私に質問したいと待っていてくださるが、次々と私に用事があり、なかなか時間がとれない。午後表副市長を教育委員会に荒

我が家には入れ場所があまりない。

二月十七日

財団の話し合い。佳子宅で、十三時〜十七時。修一、甫壬、卓也、佳子、秀彦、いくよ出席。

二月十八日

『伝書鳩』を再校して投函する。

二月二十七日

米子の「井上靖記念館」友の会の会報『海鳴り』の原稿を書き始める。昨秋に友の会会員の方々と訪ねた十一面観音についてのエッセイを書き出したが、いざ書き始めると記憶が曖昧だったり、分らなかつたりして簡単にはいかない。

三月二日

伊豆文学フェスティバル。いくよ出席。本年は湯ヶ島が中心となって行なわれている。松本亮三文学館長のお誘いで

川さんと訪ねる。もう一人の副市長岡田政勝氏、長谷川明彦総合政策部長、花香純夫社会教育部文化振興課長、山下聡司同課係長にもご挨拶し、面談。帰途雪まつりの会場になっている旭橋河畔会場へ。陸上自衛隊により大きな雪のステージが作られている。その頂上から長い長い雪の滑り台が何本も出来ていて、子供たちが滑っていた。ステージの上に荒川さんと登って会場全体を見渡した。何千個もの高さ一メートル位の同じ形の雪だるまが町中いたる所に置かれていて、可愛らしい。ナナカマドの会の方たちとのいつもの楽しい夕食後、買物公園通りで寒い中氷の彫刻を作っているのを見ながらホテルへ。出品者は全国からのホテルの調理師さんが多いと聞く。零下の夜半に一人でコッコツと作る作業は大変なもの。明日がコンクールの審査日。氷の彫刻なので多く雪が降っても、暖かくても駄目だそうだ。

篠崎啓史氏の車に便乗して出掛ける。湯ヶ島の宿がこんなに生き生きと見えたのは初めて。金物屋、かの屋、下駄屋さん、そして靖と関係のある品々を持つておられる家の協力で、各家の庭や玄関先に展示物が置かれていた。塩館のおはぎ、おぬい婆さんのライスカレー、ぬたなどお昼ご飯が地域のお母さんたちの手作りによりふるまわれ、故郷の味は本当に美味しかった。

井上家跡地の庭では、しろばんば劇団により、「しろばんば」のさわりの部分が生じられた。

晴れてはいたがやたらに寒い日だった。あすなるの木で熱い甘酒が皆に配られ、気配りもうれしく、楽しい観劇のひとつを過ぎた。

* 洪ちゃはいつも一番なのに二番に通信簿がなっているとおぬい婆さんが学校へいき、さき子先生に文句を言っている場面。
* 伊豆のお国言葉で女性二人が道端でベチャベチャとしゃべりまくっている場面。
* さき子と中川はあやしいぞ、あやしいぞと叫んで子供たちが走っていく。少ししてさき子と中川（中川役は菊池豊伊豆市長が特別出演）が「空がきれいだなあー」といいながら通っていく場面。
以上三場面が公演された。

伊藤春秀氏の講演「湯ヶ島と文学」。天城会館で。前半は靖についての話をされた。

三月四日

『海鳴り』に掲載するエッセイ、「十一面観音の思い出」と題して何とか書き

終えて投函する。風も強く、沢山の花粉が舞っているのだろう。朝から気分が悪い。

三月二十七日

旭川への移築のとき、靖関係の文学館に必要な本や品物を取りに来て頂いた。石川近代文学館にはお知らせをしなかったので、わが家にとりあえず運んできた中から、必要かどうかを伺い、靖の詩集全冊をはじめ、他の著作などダンボール四箱分を贈呈する。

父が柔道で青春時代を過ごした第四高等学校の建物が現在石川近代文学館となり、国の重要文化財となっている。この金沢時代のことを書いた作品に「北海」がある。

◎井上靖記念館青少年エッセーコンクール

平成二十四年より、「井上靖記念館青少年エッセーコンクール」が始まりました。これは、東京世田谷にあった井上靖の書齋・応接間が、生まれ故郷・北海道旭川の井上靖記念館に移転再現されたことを記念し、青少年の文学への関心と資質を高めるとともに、詩人であり小説家、そしてエッセイストでもあった井上靖の作品を後世に読み継ぐことを目的として実施するものです。なお、募集テーマは年度ごとに設定します。

主催…旭川市教育委員会（主管・井上靖記念館）／北海道新聞社
後援…井上靖記念文化財団
協賛…井上靖ナカマドの会
審査員長…吉増剛造（詩人）
審査員…平原一良（北海道文学館理事）、竹田智（北海道新聞社文化部長）

第二回井上靖記念館青少年エッセーコンクールは「ともだち」をテーマに募集され、平成二十五年十一月一日の最終審査により、中学生の部一〇二編、高校生の部八十四編の中から入賞作品が選ばれました。

中学生の部 最優秀賞
「思いを伝える」浅井美穂（北海道・小樽市立望洋台 中学校二年）
高校生の部 最優秀賞
「まみちゃん笑顔」福田茉央（愛媛県・愛光高等学校 一年）

作品提出・問い合わせ先…井上靖記念館内「井上靖記念館青少年エッセーコンクール」係
北海道旭川市春光五条七丁目
☎〇一六六一五一―一八八

事業報告

理事長 井上修一

平成二十四年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

(一) 井上靖を記念する文化賞

文学、美術、歴史等の分野において貢献した人・団体を顕彰する「井上靖文化賞」は、今年度の再開を目標に関係機関と協議、相談を続けておりましたが、いまだに再開の目途が付いておりません。

(二) 国内外における日本文化の研究助成

「井上靖（奨励金）賞」は平成十八年にオーストラリアにおける日本文学の研究奨励のために、シドニー大学に設立したものです。選考はシドニー大学の井上

靖（奨励金）賞選考委員会にお願いしてあります。今年度はその第六回になりますが、ニュージーランドのヴィクトリア大学のエドウィナ・バルマー准教授（論文「A poem to camp about?」）に差しあげることになり、平成二十四年六月一日、シドニー大学・国際交流基金シドニー・本財団共催、NSW豪日協会・シドニー日本人会等の後援で、シドニー音楽院にて授与式が行われました。

平成二十五年三月、ベトナムにおける日本文化・文学研究者への助成事業について、日本国ベトナム大使館及び国際交流基金ハノイ事務所との共催協議を行いました。

また、井上靖文学の研究団体である「井上靖研究

会」の機関誌『井上靖研究』刊行のために助成をいたしました。

(三) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

伊豆市湯ヶ島にある旧井上靖邸跡地及び跡地内の「しろばんばの碑」は、これまで本財団が所有し、維持管理・保存公開をしてまいりましたが、一般財団法人への移行を期に、当事業を伊豆市に引き継ぐため、特定寄付として当該土地ならびに「しろばんばの碑」を伊豆市へ寄贈いたしました。

また、財団の所有ではありませんが、世田谷区にあった井上靖邸の一部（書斎と応接間）を旭川市に寄贈して、旭川市立「井上靖記念館」隣接地に移築し、同市に今後の維持管理・保存公開を託する事業に協力しました。移築した建物は平成二十四年の井上靖の誕生日、五月六日から一般公開され、六日には井上靖邸書斎・応接間オープン式典及び記念講演（井上修一「井上靖と住まい」）が行われました。

井上靖の写真集の電子映像化を伊豆の写真家川田五

十六氏に委託、CDにして保存公開を可能にしました（なお、川田氏はこの仕事を完成後の二十五年夏、交通事故でお亡くなりになりました。ここに衷心より哀悼の意を表させていただきます）。その他、次のような事業を行いました。

○鳥取県日南町「日南町総合文化センター井上靖文学室」関係

平成二十四年四月一日、展示資料寄託契約を更新（平成二十七年三月三十一日まで）するとともに資料展示に協力

○旭川市立「井上靖記念館」関係

平成二十四年四月一日、旭川市立井上靖記念館と展示資料寄託契約（一年）を更新

平成二十四年六月二日から八月十九日、第一回企画展「井上靖 書斎・応接間」展の共催（六月十六日には関連の「井上靖講座」

平成二十四年七月一日、『旭川市井上靖記念館報』

第十二号の発行に協賛

平成二十四年八月二十五日から十月二十八日、第二回企画展「井上靖 人と文学Ⅱ 柔道から詩へ」展の共催（九月八日には関連の「井上靖講座」）

平成二十四年十一月三日から平成二十五年一月十三日、第三回企画展「井上靖と万葉の世界」展の共催（十一月十七日には関連の「井上靖講座」）

平成二十五年一月十九日から四月二十一日、第四回企画展「井上靖 人と文学Ⅲ 新聞記者時代」展の共催（二月二日には関連の「井上靖講座」）

○長泉町「井上靖文学館」関係

平成二十四年四月五日から九月十一日、「わが母の記」展の後援

平成二十四年九月十三日から十二月二十五日、「井上靖と敦煌・楼蘭」展の後援

平成二十五年一月七日から三月二十六日、「氷壁からの山歩き」展と「流転——若き日の井上靖と画家・堂本印象」展の後援

平成二十五年三月二十八日から七月二十三日、「鑑真遷化一二五〇年 天平の薨」展の後援

○米子市「アジア博物館」内「井上靖記念館」関係

平成二十四年四月一日、友の会会報『海鳴り』三十一号の発行に協力

平成二十四年八月二十八日、友の会会報『海鳴り』三十二号の発行に協力

平成二十五年三月二十八日、友の会会報『海鳴り』三十三号の発行に協力

(四) 日本近代文学に関する資料収集及び調査研究

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行うとともに、平成二十五年三月、日本近代文学館の資料収集に協力しました。

また当財団の資料収集・調査研究結果などを掲載発行している当財団機関誌『伝書鳩』第十三号を発行しました。

(五) 井上靖に関する講演などの開催

○平成二十四年五月二十七日、井上靖文学館（長泉町）で黒田佳子による講演『わが母の記』をかたる」を後援しました。

○平成二十四年六月一日、前項（二）のシドニー音楽院での授与式の後、磯田秀樹夫妻の指導・演出による「井上靖とシルクロード・敦煌——音楽と画像と詩の朗読」が開催され、井上靖作詩、高田三郎作曲の合唱曲などの演奏、黒田佳子による井上靖の詩の朗読とトークが行われました。

○平成二十四年六月十日、井上靖文学館で黒田佳子による講演「わが母の記 その2」を後援しました。

○平成二十四年七月二十一日、井上靖研究会の夏季研究発表会が学校法人文化学園の軽井沢山荘で行われ、本財団からも参加いたしました。蔡慧穎氏の研究発表「中国における井上靖『敦煌』の受容について」と写真家・大塚清吾氏の講演「井上靖の後ろ姿」が行われました。また翌日に井上靖の別荘の見学をいたしました。

○平成二十四年七月二十九日、石川四高記念文化交流館で行われた財団法人石川近代文学館主催の朗読会「北の海」（朗読・吉村雅弘氏）を後援しました。

○平成二十五年一月二十日、旭川市教育委員会（主管 井上靖記念館）・北海道新聞社主催、当財団後援で全国の中・高校生を対照にした第一回「青少年エッセーコンクール」が行われました。募集テーマは「母を語る」です。審査員長は吉増剛造、審査員は平原一良（北海道立文学館副館長）、竹田智（北海道新聞社文化部長）の各氏です。入賞者は平成二十五年一月九日北海道新聞紙上に発表され、一月二十日に表彰式が行われました。

最優秀賞

中学の部 名取大樹「僕の大切な母」（旭川市立常盤中学校 一年）

高校の部 佐藤有紗「私の母」（北海道室蘭清水丘高等学校 三年）

○平成二十四年十二月二日、井上靖研究会の冬季研究発表会が國學院大學渋谷キャンパスで行われ、本財団からも参加いたしました。何志勇氏の研究発表「井上靖文学における『中国』―歴史小説と紀行の間―」と、榎林晃二氏の講演「井上靖のリリズム―『わが母の記』の内質―」が行われました。

○平成二十五年一月二十七日、「あすなる忌」井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館（長泉町）・本財団共催、伊豆市・静岡新聞社・静岡放送などの後援で催されました。伊豆市湯ヶ島の墓地での墓参会に続いて旧井上家屋敷跡に鑑真和上ゆかりの瓊花の記念植樹をいたしました。午後、「天城会館」にて、井上靖作品読書感想文コンクール優秀作品の発表・表彰式が行われました。

最優秀賞

小学生の部 田村幸輝「別れ」（湯ヶ島小学校五年）
中学生の部 村上悠花「人の道」（筑波大学付属中学校二年）、島田真優子「別れと新しい出会い」（白百合

学園中学校三年）
高校生の部 堀真亜菜「『夏草冬濤』を読んで」（東京藝術大学付属音楽高等学校一年）

その後、座談会「『子どもが語る 父のナイショばなし』～家族だから語れる人間井上靖の素顔～」(座談会は井上修一・井上卓也・黒田佳子、進行は浦城義明)が行われました。

(六) その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係する次のような催しがありました。

○秋山庄太郎展

平成二十四年七月十五日から九月七日、七戸町立鷹山宇一記念美術館（青森県）にて

平成二十五年一月六日から二十二日、ヒルトピアアトスクエア（新宿区）にて

秋山庄太郎による井上靖の肖像写真を展示

○「花まつり湯ヶ島かたり会」

平成二十四年四月八日、弘道寺（伊豆市）・井上靖文学館共催

○「中国日本文学研究会 第十三回全国大会と国際学術シンポジウム」

平成二十四年八月十九日から二十日、蘭州大學（中国甘肅省）にて、中国社会科学院外国文学研究所・中国外国文学会日本文学研究会主催による特別シンポジウム「西域・遙かなる響 井上靖と中国」に参加

講演 傳馬義澄氏「歴史と文学のはざま」、井上修一「孤児と王子」

研究発表 顧偉良・高木伸幸・千葉瑠衣・植木信子・蔡慧穎の各氏

○講演

平成二十四年八月二十四日、井上修一「『本覚坊遺文』と井上靖―芸術と政治の対立」、社会科学院外文研（北京市）にて

○講演

平成二十四年八月二十七日、井上修一「家族から見た作家井上靖」、復旦大學（上海市）にて

○「井上靖と平山郁夫」展

平成二十四年九月二十二日から十一月二十五日、平山郁夫美術館（尾道市）にて

○第八回特別展「北の黒船 ラクスマン来航―光太夫帰国二二〇周年」

平成二十四年九月二十六日から十一月十八日、大黒屋光太夫記念館（鈴鹿市）にて

○「第十六回 伊豆文学フェスティバル」

平成二十五年二月一日から三月三日、天城会館（伊豆市湯ヶ島）などにて、静岡県・静岡県教育委員会・伊豆文学フェスティバル実行委員会主催、伊豆市・伊豆市教育委員会共催、文化庁など後援

第十六回伊豆文学賞表彰式・伊豆文学塾・伊豆天城短歌コンテスト・伊豆文学散歩

伊豆の文学や歴史に関する展示・伊豆市ゆかりの文学作品朗読会・伊豆市ゆかりの映画上映・文学講演・しろばんば劇団創作劇上演

○井上靖ナカカマドの会（旭川市・井上靖記念館内）

平成二十五年二月二十日、『赤い実の洋燈』四十一

号、井上靖ナナカマドの会発行

(七) 役員

平成二十四年度の本財団の役員（理事、監事）、評議員は次の方々でした。

理事長 井上修一
常務理事 浦城幾世
理事 伊藤 暁 大越幸夫 狩野伸洋 佐藤吉之輔
佐藤純子 曾根博義
監事 大谷光敏
評議員 井上卓也 相賀昌宏 小西龍作 黒井千次
篠 弘 三木啓史 三好 徹 山口 建
(五十音順)



図書だより

◎二〇一三年に発表された井上靖に関する書籍、論文、記事をご紹介します。

【書籍】

○小野寺苓『心の旅——井上靖紀行』（土曜美術社出版販売、二〇一三年）

【論文・記事】

○李哲権「井上靖の想像力の世界と海のイメージ」(『国文学年次別論文集 近代4 平成22(2010)年』国文学出版、二〇一三年)

○近藤周吾「井上靖と源氏鶏太(1)——富山詩壇における邂逅を中心に」(『富山文学の会編『富山文学の会ふるさと文学を語るシンポジウム』二〇一三年三月)

○尹芷汐「松本清張と井上靖の「登山」表象——『遭難』と『氷壁』におけるメディアへのまなざし」(『Juncture——超域的日本文化研究』四号、二〇一三年三月)

◎二〇一三年七月二十日に発行された『井上靖研究』第十二号の目次を紹介します。

【論文】

○楨林滉二「井上靖のリリズム——「わが母の記」の内質」

○顧偉良「井上靖シルクロード詩集における言語指向——素朴的、始源的、直接的な指向をめぐって」

○小関一彰「井上靖と母——『わが母の記』(『雪の面』)」

【インタビュー】

○井上修一「父親としての井上靖と作家としての井上靖」(聞き手：何志勇)

【エッセイ】

○木村雄次「枕上の四冊」
○瀬戸口宣司「詩への執念——井上靖の意識」

編集後記

春に次女が産まれました。子育てに目が回るような生活の中で、今年も『伝書鳩』を刊行することができ、大変嬉しく思います。執筆者の皆様、資料をお寄せくださった学芸員の方々、校正をしてくださった小山乃り子さんに、心より感謝申し上げます。

また、時間がかかりましたが、財団ホームページに『伝書鳩』七〜十三号を掲載いたしました。一〜六号については、もうしばらくお待ちください。
来年もどうぞよろしく願いたします。

西村承子

伝書鳩 第14号

発行 二〇一三年十二月二十日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三二五一九 井上芳

印刷所 株式会社 厚德社

発行所 一般財団法人 井上靖記念文化財団